

子どもの声を社会制度の変革につなげるチャイルドラインの戦略

—スウェーデンの子どもの権利擁護団体によるアドボカシーの分析—

○ 大阪大学大学院 吉岡洋子 (4736)

キーワード：子どもの権利、アドボカシー、スウェーデン

1. 研究目的

【背景】子どもの声を聴くことの重要性が世界的に大きく注目され、日本でも今まさにその議論と仕組み作りが始まっている。アドボカシーの概念が語られ、子どもの声を聴き個々の状況改善や社会変革に繋げるための探求が進むなか、諸外国の知見も求められている。

そこで本研究は、スウェーデンでチャイルドライン事業を行う民間団体、BRIS (Barnens Rätt i Samhälle = 子どもの権利を社会の中心に) に注目する。BRIS (1971年設立) は、社会啓発や法政策への積極的な取組と実績で知られ、現地で最も主要な子どもの権利擁護団体の一つである (Lundström2001)。この例から、子どもの声を社会に届ける仕組み作りに示唆を得たい。

【目的】子どもの権利擁護団体“BRIS”による、子どもの声を社会制度の変革につなげる取り組みのあり方と戦略をアドボカシーの観点から明らかにすること、またそれを踏まえ、チャイルドラインを基盤とするアドボカシーの特性と可能性を考察することである。

2. 研究の視点および方法

【視点】本研究では、アドボカシーを社会構造・体制の変革を意図するシステムアドボカシーを含めて広義にとらえる。堀・栄留 (2009) が示す、①個人アドボカシー／システムアドボカシー (p. 19-20)、②その二タイプの更なる類型 (セルフ／市民／専門的／法的 アドボカシー) (p. 45-46) を主たる分析の視点として用いる。

【方法】BRIS が 2019 年時点で実施する諸事業について調査、整理を行い、上記のアドボカシーの種別の観点から分析を行う。研究方法は、第一に BRIS に関する文献資料研究であり、BRIS 発行の年次報告書・資料、ウェブサイトの情報等を用いる (スウェーデン語での一次資料が中心)。補足的に、筆者が以前 (2009 年 9 月と 2017 年 3 月) に実施したインタビュー調査結果を用いる。

3. 倫理的配慮

本研究での調査は文献研究での引用等を含めてすべて、日本社会福祉学会研究倫理規程および同倫理規定にもとづく研究ガイドラインを遵守して実施した。インタビュー調査は各々の実施時に同学会の規程を遵守し、口頭と書面で調査協力及び学術上の利用の承諾を得て実施し、対象者個人が特定されないことやデータの管理等に十分留意しており、現行規程の遵守についても確認済である。

4. 研究結果

まず、諸事業の土台となる組織的な特性を、設立背景・組織運営の変容・経済的自立等の点から整理した。その上で、下表のように事業内容を整理分析した。2019年時点では、チャイルドライン事業（①）で聴く「子どもの声」をすべての基盤として、広く社会に対する発信・事業（②③）と子ども自身にアプローチする事業（④⑤）の双方向に広がっており、全体でアドボカシーの複数の側面が発揮されていることが見出された。分析の視点で上述した類型（A～H）による分析も表内に示す。

①チャイルドライン	電話やメールで子どもの声を聴き、個別の相談・情報提供を行いながら、できる限り多数の声を収集する。 ※中核事業 ※専門的・個人アドボカシー (E)
②体系的・専門的な報告書の発行と発信	チャイルドラインの内容分析に加え、毎年度の特集テーマによる報告書は、データとしてメディア等に引用され、行政・政治への発信に用いられる。 ※専門的 (一部法的)・システムアドボカシー (F,H)
③社会啓発	学校でのカード配布 (人気スター連携) 子ども全体への BRIS 認知を広めつつ、メディアでの積極的な広報活動 (電車や雑誌) を行う。知名度・信頼性の向上により、相談先として更に選ばれる。
④ウェブサイトでの情報発信と個別支援	IT 活用によりウェブサイトでの独自性・先駆性の高い情報発信 (動画やアプリ) を行う。個別支援に繋がるアプローチも含む。 ※専門的・個人アドボカシー (E)
⑤グループワーク	特定テーマはグループワークで声を聴き子どもの発信に繋げる。 ※セルフアドボカシー (A,B) の一部

5. 考察

BRIS の諸事業をアドボカシーの観点から分析した結果、子どもの声を社会に届け、社会制度の変革につなげるための取組のあり方、戦略として主に次の四点が見出された。

第一に、数十年をかけて展開してきた多様な事業のいずれも、チャイルドラインで聴かれた子どもの声をもとに社会に発信、問題提起するという手法・枠組みは不変であった。第二に、専門化の進展、それに伴う行政機関やボランティアとの役割分担の明確化がみられた。第三に、子どもの声を聴くための前段階として、IT 活用等により子どもの BRIS へのアクセスを活性化させる工夫を近年大幅に発展させていた。第四に、システムアドボカシーだけでなく、近年では個人アドボカシーやセルフアドボカシーの要素の大きい事業も開始し、両輪として進める部分が増していた。

チャイルドラインで子どもの声を聴きそこから発信するという明確な仕組みゆえに、BRIS は子どもの代理としての社会的位置づけが確立されている。そして、個々の子どもの声や存在が失われず (セルフアドボカシーの要素)、子どもの集合的な声が、大人の専門職集団 (BRIS) を通じて、システムアドボカシーとして発揮されていることが見出された。

引用文献

BRIS (2019) Bris Årsberättelse 2018.

堀 正嗣・栄留里美 (2009) 『子どもソーシャルワークとアドボカシー実践』明石書店

Lundström, Tommy (2001) Child Protection, Voluntary Organizations, and the Public Sector in Sweden, *Voluntas*,12(4), 355–371.